

土木逆風世論の真実 沈黙の螺旋理論による政治心理分析

東京工業大学大学院 正会員 藤井 聡

1. はじめに

平成14年度、道路関係四公団民営化推進委員会（以下、民営化委員会と略称）はマスコミを大いに賑わした。7人の委員を昔の映画のストーリーになぞらえて解説する等、土木学会に直接関連するニュースの中では珍しく大衆の情操に働きかけるメッセージを少なからず含んだ報道がなされた。その委員会の一委員である中村氏は、土木学会誌の平成15年度3月号に掲載した論説の中で、委員会での議論、ならびに、そこで氏が主張した民営化案とその合理性を紹介しつつ、最後に次のように論じている（中村，2003）。「最も合理的であり、すぐれた改革が実現する途であると私が考えるにもかかわらず、委員会では少数意見であり、また、いくつかのマスコミ等では支持されなかったのは何故かと考えずにはいられない(p.8)」そして、この理由として社会資本が概ね充足してきたこと、土木関連の不祥事等を起因として生じた世論が演じた役割の大きさを指摘した上で、「私たちがなすべきことは、行うべき事業はその必要性を国民の多数が納得できるような優れた分析的な評価手法を作り出し、その過程と結果を透明性高く示すという地道な途しかないと考えるのである(p.8)」と論述している。

言うまでもなく、筆者はこの主張に大いに賛同する。恐らくはこうした地道な努力を土木学会がやめた瞬間に土木事業は永遠に合理性を見失うこととなろう。だからこそ地道な努力は絶対に不可欠である。しかしながら筆者は「地道な途しかない」とは決して考えない。

それは、なぜか？

本稿ではその理由を「世論」というキーワードを政治心理学的に論じつつ、述べることにしたい。

2. 沈黙の螺旋理論

世論が形成される社会的メカニズムを説明する諸理論の中で、少なくとも今日最も影響力を持つ社会科学理論は「沈黙の螺旋理論」である。これは世論形成過程を次のようなものと仮定する(Noelle-Neumann, 1982)。

step 1) 人々は自らの意見が多数派であると認識すれば、自らの意見を公表する傾向が向上する。一方で、自らの意見が少数派であると認識すれば、孤立を恐

れるあまり、自らの意見を公表する傾向が低下する（すなわち、沈黙する）。

Step 2) かくして、社会の中で公表される意見は“自らが多数派であると認識している人々”の意見ばかりとなり、少数派であると認識している人々の意見はほとんど聞かれなくなってしまい、ますます“世論意見”の人々は自らの意見をより声高に公表する様になる一方、“非世論意見”の人々はますます沈黙するようになる。

Step 3) 以上の“螺旋”（スパイラル）により、非世論意見の人々の多くは世論意見に“同調”し、非世論意見から世論意見への意見を転向することとなる。

3. 賛成者の沈黙

さて、著者は共同研究者と共に2001年（すなわち、民営化委員会以前）に土木事業についての賛否意識調査を京都市在住の人々から無作為抽出した被験者を対象に行った（1600世帯配布，680部回収，回収率42.50%；詳細は矢野ら，2002参照）。この調査では「あなたは、政府・行政の土木事業を支持しますか？」「世間の人々は、政府・行政の土木事業を支持していると思いますか？」のそれぞれについて“強く反対”を1，“どちらとも言えない”を4，“強く支持”を7とする尺度で測定した。以下、前者を賛否意識、後者を認知世論と呼称する。また、「普段、政府・行政の土木事業について身近な人と話したことがありますか？」「政府・行政の土木事業についてのあなたの意見を主張したことがありますか？」についてそれぞれ“ない、何度かあった、時々ある、よくある”からの選択も要請した。以下、前者を会話傾向、後者を主張傾向とする。

もしも、沈黙の螺旋の過程が土木事業に関連して生じているのなら、賛否意識は、会話傾向と主張傾向の双方と負の相関を持つはずである。それを検証するために、SPSSの順位相関分析を行ったところ、それぞれに有意な負の相関が見られた（会話傾向： $\rho = -0.081$, $n = 656$, $p = .037$ ；主張傾向： $\rho = -0.120$, $n = 659$, $p = .002$ ）。やや誇張気味に解説するなら、土木事業に賛成意見を持つ人は、その意見を“主張”することがないばかりか、身近な人々と会話することすらためらっている一方、土木事業反対の人々は身近な人と好んで土木事業の話をするばかりではなく、（世論の虎の威を

借り）人前で雄弁に自説を語りたがるのである。すなわち、土木事業の賛成意見を押しつづす雰囲気、民営化委員会の1年前から既に充満していたのである。

4. 虚構の逆風世論

さて、沈黙の螺旋過程が進行すれば、耳にするのは土木事業に反対意見ばかりとなる。それ故、人々は、「世間の人々は皆土木事業に反対なのだ」と、**実際以上に過度に思いこんでしまう**。すなわち、人々の“認知世論”は、人々の賛否意識を実際に集計したものよりも土木事業により否定的であることが理論的に予想される。この点を確認するために、認知世論の平均と賛否意識の平均を比べたところ、前者の方が後者よりも有意に低いことが示された（賛否意識平均=3.86 [n = 665, 標準偏差=1.52], 認知世論の平均=3.69 [n = 663, 標準偏差=1.22], 差の t 値=3.68, $p < .001$, $n = 661$ ）。さらに、“どちらとも言えない”の4との差異の検定を行ったところ、5%の有意水準ではいずれについても有意差が見られたのだが、1%の有意水準においては認知世論については有意差が示された一方で (t [662]= 6.57, $p < .001$), 賛否意識については有意差が確認出来なかった (t [664]= 2.30, $p = .02$)。つまり理論の予想通りに人々が想定する意見分布と実際の意見分布とは乖離しており、かつ、実際の人々の意見分布は必ずしも土木事業に否定的ではないのである。

さらに属性別に賛否意見の平均を確認してみると、女性 (n = 130) が 3.62 と 4 よりも有意に低い一方 (t [129] = 3.05, $p = .003$) で男性 (n = 533) は 3.92 と 4 と有意差が無いことが (t [532] = 1.24, $p = .22$)、若年層 (40 才未満; n = 78) は 3.30, 中年層 (40 才以上 60 才未満; n = 276) は 3.64 といずれも 4 よりも有意に低い一方(それぞれ, t [77] = 4.76, $p < .001$; t [275] = 4.31, $p < .001$)、高齢層 (60 才以上; n = 308) は 4.19 と 4 よりも有意に大きいことが示された (t [307] = 2.04, $p = .040$)。また、賛否意識に最も大きな影響を及ぼしていたメディア (矢野ら, 2002) である朝日放送ニュース視聴に着目したところ、視聴者は否定的な意見を形成している一方 (t [419] = 3.46, $p = .001$)、非視聴者は否定的な意見を持っていない事が示された (t [237] = 0.70, $p = .487$)。

5. 合理と理念

以上の分析が物語るのは、次のようなことである。すなわち、人々は土木事業に反対しているであろうと

誰も予期するとともに、土木事業に賛成意見を述べることを重圧する無言の重圧が存在している、という意味においては確かに“逆風世論”は存在する。しかし、実際の意見分布は必ずしも土木事業に反対ではない。

以上を踏まえるなら、逆風世論の正体とは、実際の人々の意見分布にあるのではない。それよりはむしろ、**一人一人が心の中に持つ「逆風世論が存在している」という誤った認識**こそが逆風世論の正体なのである。沈黙の螺旋理論が予測するように、その認識こそが賛成者の沈黙と反対者の雄弁さを導き、逆風世論という虚構を築き上げている。そして、その認識が存在する以上は、ますます沈黙の螺旋過程は加速し、そのうちに (Step 3) の状態、すなわち、**本当に**大半の人々が反対となる日が来てしまうかも知れないのである。

幸いにして本稿で示したデータは、少なくとも 2001 年では世論は既に (Step 3) に至ってはいるもののその進行は未だ完全ではないことを示唆している。もしも沈黙の螺旋過程の完全なる進行を食い止めることが公共と社会のために必要であるのなら、冒頭で引用した中村氏が主張されている様に、公共事業評価の合理的方法の開発による地道な努力は不可欠であろう。しかし、誠に遺憾ながら、沈黙の螺旋理論が予想する様に“世論”は合理的認知のみで動くのでは決してない。孤立への恐怖や他者への同調といった非合理性に支配されるこそが大衆の世論なのである。その点を踏まえるなら、土木事業の必要性を“認知”に訴えかけるだけではなく、公共計画が目指している**理念を一人一人に訴えかける**ことこそが必要なのではなかろうか。人々がもしその理念に心の底から同意するのなら、無言の重圧をはねのけてでもその理念を身近な人々と語り、それを主張することすら厭わなくなるかも知れない。もしも多くの人々がそうなるのなら、その時初めて土木逆風世論の虚構が崩れ去ることとなるのかも知れない。その日に向けて「私たちがなすべきこと」は、合理的計画論だけでなく理念的計画論も併せて研ぎ澄まし、その上で国民に適切に語りかける方法を模索する事ではないかと、僭越ながら、筆者は考えるのである。

参考文献

- 中村英夫 (2003) 道路公団 4 公団民営化推進試験会の議論と私の考え, 土木学会誌, 2003 年 3 月号, pp. 2-8.
 Noelle-Neumann, E. 著 (1982) 池田謙一・安野智子訳(1993), 沈黙の螺旋理論: 世論形成過程の社会心理学, プレン出版.
 矢野晋哉, 藤井聡, 須田日出男, 北村隆一 (2002) 土木事業に関する賛否世論の心理要因分析, 土木計画学研究・講演集 (秋大会), CD-ROM, No. 26.